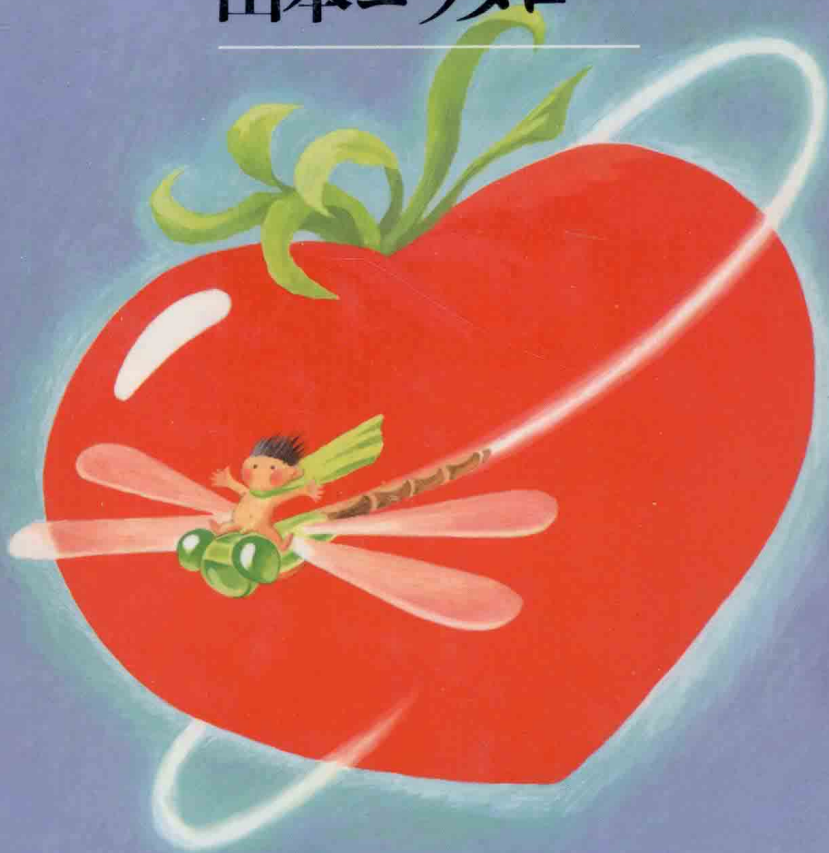


燃えよ エコトピアン

「本来イズム」宣言なのだ

山本コウタロー



著者について

山本コウタロー（やまもと・こうたろー）

一九四八年、東京生まれ。一橋大学社会学部卒業。在学中からフォーク・グループを組み、『走れコウタロー』『岬めぐり』などのヒット曲で知られる。深夜放送のDJをはじめ、ラジオやテレビで活躍してきた。現在、NEW Sレコード、制作部長。

著書『誰も知らなかったよした拓郎』（八曜社）『アメリカあげます』（小学館）『ぼくの音楽人間カタログ』（新潮文庫）ほか多数。

燃えよエコトピアン——「本来イズム」宣言なのだ

一九八四年七月一五日発行

著者 山本コウタロー

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一—二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六一六二七九九

壮光舎印刷・美行製本

八九〇円

© 1984 Koutaro Yamamoto

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉 落丁・乱丁本はお取替えいたします。

燃えよ エコトピアン

「本来イズム」宣言なのだ

山本コウタロー



晶文社

ブックデザイン
平野甲賀

燃えよ エコトピアン

「本来イズム」宣言なのだ

目次

僕の「本来イズム」宣言——愛して愛して生きるには

13

1 街に暮らす

夢のカリフォルニア 18

ワタワシ野球も仕事です 22

逃れの街 26

僕のタキシード体験 29

私はかつて超能力者だったのだ 33

住まいかたの哲学 36

書斎からの脱出 39

とり戻すのだ、夜の闇 44

2 「メイキング・ラブ」考

「メイキング・ラブ」考	50
愛し合ってるなら「ベスト・フレンド」で	54
「不倫の恋」宣言について	57
NHKホールでの不可思議体験	60
ブライバシー虚構化時代	64
シンデレラとビーターパンの結婚	67
「結婚」普通「幸福」？	70
「愛」の犯罪心理学	73
日本の風土	76
奴隷の性	79
間違いだらけの「性教育」	82

3 コウタローが走る

「生きザル」人間	104
暴力列島ニッポン	106
ブッシュマン・ファイバー	109
タバコこそ公害	112
不健康な「健康フーム」	116
東洋人に戻れるか	120
飛べない鳥ペンギン	123
文明拒否症	125
AIDS騒動	129

納税の季節 133

核の時代を生きのびるには 135

コンピュータは使いよう 144

現代「TV幻魔」論 147

誰が育てた「エイリアン」 152

4 エキサイティング・ムービー

壁 158

ビートルズがやってくる 161

テクノポリスTOKYO 164

ニュー・ジャーマン・シネマ 167

ヒーローたちのナチュラルな悟り 171

民衆の敵

174

ガンジー

178

ガーブの世界

181

5 ことばのカタログ

私は突然しゃべりだした

188

「のる」と「ウケる」

190

「ドロッツ・アウツ」と「落ちこぼれ」

192

軽薄短小

195

言葉は人間の住むおうち

197

アナログ礼賛

200

略語はやりに一言申す

202

コミュニケーション？ コジニケーション？

205

眠れない時代 207

流行り言葉について 210

コピーライターはもういない 212

フリー・トーキング 合言葉はラディカル！ 215

あとがき 232

初出一覧 234

僕の「本来イズム」宣言——愛して樂して生きるには

いま、一九八四年のある一日。夜。外は暗く、耳を澄ませば、サイレンやら、クラクションやら、バイクの駆けぬける音やら、階下の住人の聴くステレオの音やらがする。そして僕は、電気を消してもなお明るい東京は六本木の一室で、ささやかに呼吸している。

本来、夜は暗かった。物音といえば、風の音、獣の鳴き声、そして仲間たちの寢息。僕たちは、明るさや便利さを獲得はしたけれど、同時に失ったものも数多い。

そのうえ、情報という奴が徘徊している。テレビは音と光をタレ流して、僕たちの耳目に侵入してくる。雑誌はより過激に、需要喚起の絶叫を見出しやコピーに託して、電車のつり広告や新聞、書店、いたるところで、僕たち呼びかける。

僕たちは、いやでも情報を食べさせられ、いまや満腹し、この肉体は情報太りで歩けないくらいになってしまった。

この本は、そんな僕たちへの情報ダイエットの本である。

僕たちは、本来は何もいらぬのだ。三浦某氏の名前など知らなくても生きていけるし、生きてあることの証しは、人それぞれの楽しみのなかにいくらだてあるはずなのだ。

何をやったっていい。よほど他人に迷惑をかけたりしないかぎり。人生のエンジョイの仕方は、人間の数だけあるはずなのだ。それが本来の姿である。

いつのまにか僕たちは、僕たち自身をさえ「わかり易さ」という鑄型にはめこんで生活しはじめてしまったのではないか。「らしく」という言葉の制服に身を固めることに安住してしまっただけではないか。

時代は変わり、日本全体が都市化するなかで、家族形態はといえば、核家族となり、かつての家父長的なスタイルはその存在基盤さえないというのに、旧態依然の「父らしさ」や「子らしさ」がまとわりついて、自分たちを苦しめている。

離婚の激増、校内暴力、家庭内暴力、老人問題など、すべての今日的課題は、人と人とのコミュニケーションの問題である。形骸化した「らしさ」にとらわれることなく、人間一人ひとりのあるべき姿を見つめるときなのだ。

さて、そうした諸問題の解決策なのだが、それはすっごく簡単なのである。しつこいよう

だが、本来あるべき姿に立ち戻ればよいのだ。僕はそれを「本来イズム」と呼ぶ。

男と女でなく、まず人間と人間として考える。これが「本来イズム」である。そうすれば、男だからの見栄も消え、女からの抑圧もすくなくなるだろう。女が子を産むのは、たまたま与えられた能力に過ぎないのである。

仕事と家庭を分けるのはやめよう。全生活としてとらえよう。これが「本来イズム」である。かつて、農耕であれ、狩猟であれ、それは仕事ではなく、生活の一部であった。そこで子は父母に学び、自らを大人と対峙させながら成長を待った。いま、家庭と職場を切り離してしまうことによって、父は、朝出たら深夜まで帰らぬ「高級下宿人」となり、母は子を溺愛し、子はピーターパン・コンプレックスから抜け出せぬまま、いたずらに時だけが過ぎてゆく。

テレビは基本的に消しておこう。節電にもなる。そして自分で考え、できるかぎり人と話そう。これが「本来イズム」なのだ。

僕たちの持っているイメージする能力は、無限であり、アイディアの宝庫である。それを捨てて、カタログの鋳型にはまることは、自らの人生の設計を他人に委ねることにほかならない。あの山下久美子でさえ（ごめんね。ステージでのシャウトは相変わらず最高）、情報は